

現代中国の書家二十人を紹介する連載

中国当代書家二十人

第12回

中国書法家協会主席
監修／蘇士澍

取材・文／郭同慶

118

周慧珺

周慧珺

しゅう・けいくん

一九三九年、上海に生まれる。中国書法家協会副主席、上海市書法家協会主席などを歴任。二〇一四年に第六回上海市文学芸術賞・傑出貢献賞、二〇一九年に第七回上海市文学芸術賞・終身成就賞を受賞。また上海にて、二〇一六年に周慧珺書法芸術館、二〇一七年に周慧珺書法芸術研究院が落成。二〇一八年には周慧珺書法芸術基金を創設。主な著書に《周慧珺行書字帖——魯迅詩歌選》《周慧珺行書——杜甫詩選》《周慧珺楷書——前後赤壁の賦》《周慧珺行草——千字文》など

上海の教養ある家庭に生まれた周慧珺氏は、文化大革命後の第一号のプロ書家として上海中国画院に所属。また当代の書家として初めてとなる字帖《周慧珺行書字帖——魯迅詩歌選》を発売し、同書は七〇年代に大ベストセラーとなった。二年前からの取材交渉が実を結び、郭同慶氏がついに周慧珺氏と面会した。(編集部)

千古江山英雄無覓孫仲謀處
舞榭歌臺風流總被雨打風吹去
斜陽草樹尋常巷陌人道寄奴曾住
想當年金戈鐵馬氣吞萬里如虎
小住京華長河落日沈沈照鬢華
故壘三遺故壘三遺故壘三遺故壘三遺

千古江山英雄無覓孫仲謀處
舞榭歌臺風流總被雨打風吹去
斜陽草樹尋常巷陌人道寄奴曾住
想當年金戈鐵馬氣吞萬里如虎
小住京華長河落日沈沈照鬢華
故壘三遺故壘三遺故壘三遺故壘三遺

千古江山 英雄無覓 孫仲謀處 舞榭歌臺 風流總被 雨打風吹去 斜陽草樹 尋常巷陌 人道寄奴曾住 想當年 金戈鐵馬 氣吞萬里如虎
元嘉草草 封狼居胥 贏得倉皇北顧 四十三年 望中猶記 烽火揚州路 可堪回首 佛狸祠下 一片神鴉社鼓 凭誰問 廉頗老矣 尚能飯否

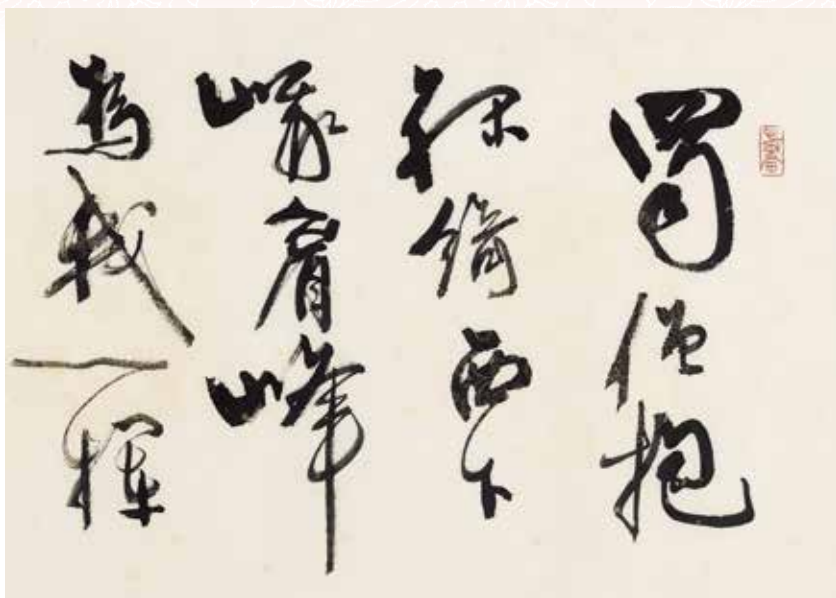
書法史に刻まれる女流大家 周慧珺

終身成就賞を受賞

二〇一九年十月十六日の晩。上海市が主催し、五年に一度に行う「第七回上海市文学芸術賞」の式典が上海大劇場で行われた。上海市書法家協会名誉主席の周慧珺女史が二〇一四年に「第六回上海市文学芸術賞・傑出貢献賞」を受賞したのに続いて、今回は越劇王派の創始者・王文娟、著名な作曲家で指揮者の何占豪、

京劇工麟派俳優・陳少雲、および女優で著名作家・黄宗英とともに同賞の最高賞「終身成就賞」を受賞したのである。今年の同賞の「傑出貢献賞」には、篆刻書画家の韓天衡（本誌二六〇号、連載第十回で紹介）などの五人が入った。中国共産党上海市委員会・李強書記が車椅子で出席して周慧珺女史など五人受賞者に「終身成就賞」賞杯を渡し、応勇市長が韓天衡氏らの五人に「傑出貢献賞」賞杯を授与した。

《聽蜀僧濬彈琴》（李白）

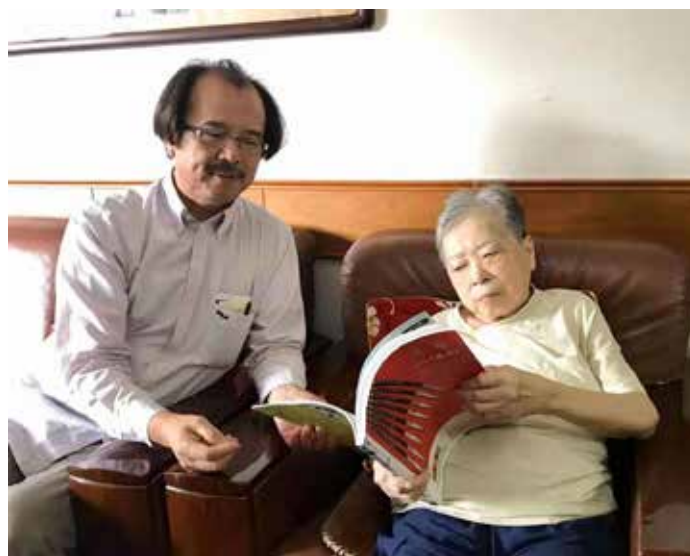


五年に一度の「文学芸術賞」（終身成就賞と傑出貢献賞）は多彩多様な文学芸術界を五分野に定め、書法篆刻は「美術分野」に属している。しかし、今年の美術分野では「終身成就賞」とともに「傑出貢献賞」も、絵画でもなければ彫刻でもなく、書壇より選出された。また重度な持病を持つ周慧珺女史が近年は外部と一切接触をしていない状況にもかかわらず、五年前に「傑出貢献賞」、今回は最高賞「終身成就賞」を受賞したことには注目すべき価値がある。受賞式典では、周慧珺女史の愛弟子・李静（上海市書法家協会副主席）が代わりに謝辞を述べた。

亦商亦儒の家庭で育つ

著名な作家・趙麗宏は、「周慧珺の人生は広々とした王道を疾走する順風満帆なものではなく、氏の成功の裏には苦難と不遇が詰め込まれている」と語った（《談芸録》、復旦大学出版社、二〇〇九年）。

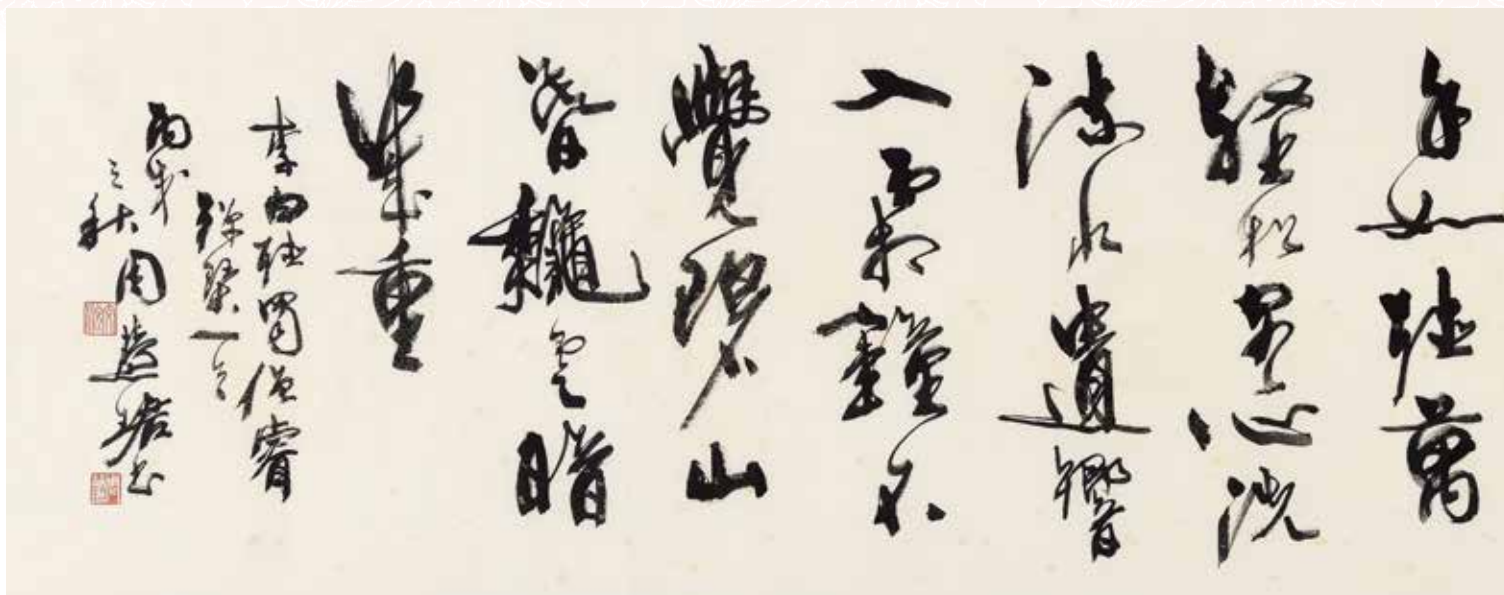
周慧珺は、民国二十八年（一九三九）の冬に上海の租



『墨』を手にする周慧珺氏(右)。近年は中国国内の報道機関とも接触していないが、郭同慶氏(左)がついに取材を実現した

界地で生まれた。父親は「寧波商人」で、北京東路に面した「義昌」という金物商店を営み、戦後に他の店と統合し、現在の「上海第一金物商店」となる。父親の周志醒（一八九七—一九七九）は勤勉さと鋭い感性を以て一代で「上海金物商の雄」となり、余暇は読書を趣味とし、また文人や書画収集家との交わりを好んだ。家にはよく文人や書画家が入りし、いわば「談笑は鴻儒（学問の深い人）あり、往来は白丁（一般の人）なし」という劉禹錫の詩句の通りだ。

時の収蔵名人である龐元濟（一八六四—一九四九）や呉璧成（生没不詳）らに教わりながら、書画や骨董を蒐集し、特に山水画の名品を集めた。清初山水大家の四王（王時敏、王翬、王原祁）や当時上海で人気が高い「三呉一馮」（呉湖帆、呉待秋、呉華源、馮超然）が多かった。龐元濟の書齋である「虚齋」はすぐ隣の成都路にあり、名画の鑑賞や購入のために周志醒は足繁く通つ



蜀僧抱綠綺 西下峨眉峰 為我一揮手 如聽萬壑松
客心洗流水 遺響入霜鐘 不覺碧山暮 秋雲暗幾重

た。「画を嗜むこと命の如し」といわれるほど、周志醒が蒐集した夢中となっていた時期のある日、王翬の名品に出会った周志醒は十本の金塊を差し出して購入し、その大金の出費で家族を困らせたほどであった。

周志醒は自分の蒐集人生の集大成を時の儒学者・唐文治（一八六五—一九五四）に依頼し、標題として《竹徑草堂記》を撰文してもらったほどの真正正銘の書画の大コレクターだったのである。また、依頼された唐文治は清朝の中央官僚を経て、私財を投げ打って無錫（江蘇省）で「國學院」（蘇州大学の前身）を創立した教育家である。筆者の師・王遽常は唐文治翁の弟子であり、同院の一期生で、卒業後に教務長まで務めたことがある。

さて、商人でありながら、余暇は文人、儒学者、ならびに書画家と深く交流した周慧珺の父・周志醒は家中に明清の書画を飾り、愛する子供たちのために儒学者の書齋に特有の淑やかな環境をつくった。周慧珺嬢は自然に誰よりも早く詩文や書画に対する関心が芽生えた。周慧珺嬢は書画の稽古が好きで腕を磨いた結果、学校で書画で勉強もよくできた。周慧珺嬢は優れた成績で小中高とも名門校に入った。中学は毛沢東主席が「青鋒」（青年の先鋒）という題字を送ったことで大変有名な南洋模範中学校で、高校は孫文夫人・宋慶齡、そして蒋介石夫人・宋美齡、そして長姉の宋霽齡——「宋氏三姉妹」が卒業した上海市第三女子高校（戦前は米国キリスト教会が運営した女子高校）だった。

大学は上海科学技術大学薬学部に入った。実は家系的に周慧珺嬢は姉とともに、成長に伴いリウマチ性関節炎が発病して日々顕著となり、医学や薬学に明るい家族が必要と考える家族の切ない希望に促されて薬学部に入ったが、一年未満でリウマチ性関節炎が発病し、やむを得ず退学となり、自宅にある自分の部屋に籠もった。

名帖名師の生涯

老子の言葉に「禍は福の倚る所、福は禍の伏す所なり」とある。一九五九年に退学した周慧珺嬢は重病と退学のショックで一カ月ほど寝込んだ。その後、好きな読書や習字に打ち込むことで病魔からの解放の瞬間を体験し、徐々に今後の人生を考え、立ち直った。

ある日、書庫にある書法の書籍の山の中から、表紙が破れるほど古い一冊の字帖（法帖）を手にし、捲った周慧珺嬢は、思わず声を上げた。「これだ、父が兄に書かせていた行書字帖だ」。周慧珺嬢が手にしたのは「宋四家」の一人である米芾の若い頃の力作《蜀素帖》だった。周慧珺嬢は米芾の意気軒昂とした若いエネルギーを強く感じた。また米芾の「八面出鋒」の筆法による、千変万化の点画の表情に魅了された。以来、数年間をかけて《蜀素帖》を中心に米芾書に専念し、徹底的に研鑽した。



周慧珺氏は父・周志醒氏が蒐集した書画で埋め尽くされた環境で成長し、大家が必要とする見識を磨いた

数年後、転機が訪れた。

北京大学長を経験した沈尹默氏は、晩年、上海で余生を送っていた。一九六一年四月、沈氏の呼び掛けで上海市書法家協会の前身の上海中国書画篆刻研究会が設立され、翌年、「第一回上海市書法篆刻展」を開催した。二十三歳の周慧珺嬢は《蜀素帖》を臨書した作品を、兄と一緒に出品した。数週間後、想定外の結果が発表された。既に書家として知名度があった兄は落選し、逆に無名の周慧珺嬢が勝ち残り、さらに上海において発行人部数で一番を誇る《新民晚报》の文芸欄に、書壇の大御所らの作品と並んで作品が掲載されたのである。まさに《史記》の句の通り、「一鳴驚人」（「たび鳴けば人を驚かす」）の如し。一夜で周慧珺嬢は上海の名人になった。周慧珺嬢は飛び上がるほどの喜びに満たされた。

誘いもあり、同年、上海市青年宮の研究会が主催する「書法講座」に入会した。ここで書壇の大家に初めて出会った。会長の沈尹默氏を初め、白蕉、拱德隣、翁闓運、胡問遂、銭君匋、趙冷月などの名士が各講座を担当し、厳選された受講生は後に上海書壇を背負う書家となった。沈尹默氏は市政協、市博物館、市文聯等々、数え切れないほどの公職を兼務する状況下で講座には減多に出来ない。担任の教官、拱德隣氏は博学で丁寧な教授し、米芾書しか知らなかった周慧珺嬢にとって最も適任の魅力溢れる先生だった。拱先生に着いて得たものは多く、講座終了後も拱先生の自宅に通い、稽古を継続した。同じ青年宮の講座では達弁な二人目の先生・翁闓運（一九二二—二〇〇六）に出会い、いつも翁先生の博学に魅了された。

翁闓運氏は上海中国画院に所属するプロ書家であり、儒学者・唐文治の門下生でもあるため、国学、歴史、詩文にもとても強い。文化大革命（一九六六—一九七六）の期間中は「牛棚」（革命とされる対象の思想を改造す

る特殊な牢）で酷い屈辱を受けたが、文革の終了後は画院に復帰した。自宅がある呉淞路から岳陽路にある画院まで通うには必ず北京路にある周慧珺嬢の自宅前を経由しなければならない。翁先生は難病を患う教え子に気が掛け、ある日、突然に訪ねた。周慧珺嬢はパニックになるほど驚いたが、ちょうど書法のさらなる邁進の方向性で迷っているところだった。先生の来訪を周慧珺嬢は大変喜んだ。翁先生は周慧珺嬢が書いている米芾書風を肯定した上、視野を広げようとアドバイスし、自ら旧蔵する《聖教序》《祭姪稿》《争座位帖》《憶旧遊》などの碑帖を持参してくれた。文革で一掃された碑帖は非常に入手困難な時代で、周慧珺嬢にとっては言葉にできないほど有り難かった。

翁闓運先生は周慧珺嬢にとっては二人目の師匠というだけではなく、伯樂（人物を見抜く眼力のある人）でもあった。

文化大革命の終焉が聞こえた一九七五年、上海中国画院は中青年の人材が大変に不足している状況の改善策として、民間より厳選して中途採用を図った。周慧珺氏は翁闓運氏の強い推薦で画院入りを果たし、文革後の第一号のプロ書家となった。さらに数年後、書壇で活発な業績をあげていた者の中から、水道局から韓天衡、副食品市場より童衍方、光学儀器工場より張森を転職させ、画院の活力を充実させた。その後、周慧珺氏をはじめ、四人とも大活躍し、名実ともに上海の書壇印壇の牽引役となった。

行書字帖で名を馳せる

一九七二年に日中の国交が正常化し、すぐさま文化交流も復活して往来が頻繁となった。

一九七三年一月、雑誌《人民中国》が、「現代書法作品集選」の特集を組んだ。北京、上海、南京、杭州、

蘇州などの二十一名書家の近作が大々的に紹介され、三十四歳の女流書家、周慧珺氏の《行書杜牧・山行》も、林散之、沙孟海らの大御所の作と並んで掲載された。一九七四年、周慧珺氏の実力をさらに披露するチャンスが巡ってきた。

時は文化大革命の結末に当たり、古い碑帖はまだ公に使用できず、字帖を求める声が高まる中、上海書画出版社が対応策を考えた。担当責任者である周志高氏（本誌二五六号、連載第七回で紹介）が動いた。周志高氏は当局が認めやすい《魯迅の詩歌》を以て、当代の書家の揮毫による新しい字帖を提案し、許可を得た。

周志高氏は、美しい行書を書いて、人気が始まった周慧珺氏に打診したが、周慧珺氏はまだ未熟だからと拒んだ。しかし周志高は簡単には諦めることができず、上海中国画院に行き、方去疾、翁闓運らに助けを求めた。画院の先輩たちの説得もあって、最終的に周慧珺氏が揮毫の依頼を受けた。

周慧珺は難問に直面した。簡体字で書くことだ。古典臨書はもちろん、展覧会での出品にも繁体字のまままで書いてきた周慧珺氏は、あまりにも画数が省略された簡体字にかなり戸惑った。たとえば「書」は十画の最も美しい字であるのに、省略されて四画となり、非常に書きづらい。病魔による試練によって精神力が磨かれてきた周慧珺氏は試行錯誤を繰り返した。試案や試作の紙は、書齋に満ち溢れた。そしてその成果として立派な原稿を書き上げた。

準備に時間を費やしたが、最終的には周慧珺氏は一気に書き上げたそう。まさにその時、周慧珺氏は自身の書風を確立したのである。その書風は米芾書風をベースに、翁闓運師が薦めた顔真卿の書にある広々とした重厚な要素を汲み上げ、かつ難病に負けない不屈不撓な精神を組み込んだ、周慧珺氏独自の斬新な書風である。

獨坐寒秋湘江北去橘子洲頭看萬山紅遍層林盡染漫江碧透百舸爭流鷹擊長空魚翔淺底萬類霜天競自由
 恰同學少年風華正茂書生意氣揮斥方遒指点江山激揚文字糞土當年萬戶侯曾記不到中流擊水浪遏飛舟
 北國風光千里冰封萬里雪飄望長城內外惟餘莽莽大河上下頓失滔滔山舞銀蛇原馳蠟象欲與天公試比高須晴日看紅裝素裹分外妖嬈江山如此多嬌引無數英雄競折腰惜秦皇漢武略輸文采唐宗宋祖稍遜風騷一代天驕成吉思汗只識彎弓射大雕俱往矣數風流人物還看今朝
 有凌雲志重上井田山千里來尋故地瀟湘換新顏到愛鵝歌燕舞更有潺潺流水高路入雲端過了黃洋界險要不須看風雷動旌旗奮起入雲天
 十八年過去彈指一揮間可上九天攬月可下五洋捉鱗誅惡龍還看今日無難事只要肯登攀

獨立寒秋 湘江北去 橘子洲頭 看萬山紅遍 層林盡染 漫江碧透 百舸爭流 鷹擊長空 魚翔淺底 萬類霜天競自由 恰同學少年 風華正茂 書生意氣 揮斥方遒 指点江山 激揚文字 糞土當年 萬戶侯 曾記不到 中流擊水 浪遏飛舟 北國風光 千里冰封 萬里雪飄 望長城內外 惟餘莽莽 大河上下 頓失滔滔 山舞銀蛇 原馳蠟象 欲與天公 試比高 須晴日看 紅裝素裹 分外妖嬈 江山如此 多嬌 引無數英雄 競折腰 惜秦皇漢武 略輸文采 唐宗宋祖 稍遜風騷 一代天驕 成吉思汗 只識彎弓 射大雕 俱往矣 數風流人物 還看今朝 有凌雲志 重上井田山 千里來尋 故地瀟湘 換新顏 到愛鵝歌 燕舞更有 潺潺流水 高路入雲 天十八年 過去彈指 一揮間 可上九天 攬月可下 五洋捉鱗 誅惡龍 還看今日 無難事 只要肯登 攀

《沁園春·長沙》（毛沢東）

文化大革命が終了する二年前の一九七四年、当代書家が揮毫した字帖として全国で第一冊目となる《周慧珺行書字帖——魯迅詩歌選》が発売された。細い縦の稿模様がある赤い表紙が全国の新華書店の店頭に一斉に並ぶと、飛ぶように売れて、わずか数日間で完売。十数回も再版を繰り返し、百万部の大台を遙かに超えるベストセラーとなった。まさに字帖出版史上、空前絶後の出来事といえる。今もなお、その記録を打ち破

る者は出ていない。以来、十数年にわたり全国的に周慧珺書の旋風が巻き起こり、書法を研鑽した者や書法に関心を持つ者の大半は周慧珺氏のファンになった。中国作家協会主席や文化省大臣などを歴任した著名作家の茅盾（二八九六—一九八一）もその一人である。筆者はちょうど勉強盛りの二〇代だったので、《周慧珺行書字帖——魯迅詩歌選》を何度も臨書した記憶がある。

画院でのプロ人生

上海中国画院は、一九五八年に豊道春海団長が率いる戦後初の訪中団（主に青山杉雨、村上三島、金子鷗亭ら）が正式に訪問したことで、日本でもよく知られている。プロに転身した周慧珺氏は上海中国画院の書法組に所属し、体調が許す限り、必ず出勤し、大半の時間を資料室で過ごした。画院は優れた蔵書を誇り、



天高雲淡 望斷南飛雁 不到長城非好漢 屈指行程二萬 六盤山上高峰 紅旗漫捲西風 今日長纓在手 何時縛住蒼龍

周慧珺氏は研究と創作に励んだ。

家にあつた米芾の《蜀素帖》、また、青年宮の書法講座を主催した書画研究会の会長の沈尹默は王羲之書風の継承者で、各種の「帖」で勉強方法を提唱してきた。その影響もあつて、周慧珺氏はほとんど「北碑」に触れてこなかったが、画院の資料室にある《高霊廟碑》《廣武將軍碑》など各種の六朝碑の拓本に直面し、周慧珺氏はその魅力を感じた。恩師の翁闓運氏は拓本の權威でもあつたため、碑拓書法をとことん勉強した。数年後、周慧珺氏の書風が新天地に到達した。六朝碑の方筆などの要素を吸収し、「帖型碑質」の新しい書風を創出したのである。

《周慧珺行書——杜甫詩選》《周慧珺楷書——前後赤壁の賦》《周慧珺行草——千字文》など、十数種の新書体の字帖を次々と出版社より発売し、すべて好評をもつて迎えられた。

八〇年代の初めには鄧小平による改革開放路線が推進され、その恩恵は、経済はもちろん文化芸術にも波及した。書画の売買が徐々に復活し、画院の画家・書家たちにもその恩恵が訪れた。当時の中国は物価が非常に低かつたため、日本やアメリカの旅行者は書画や文房四宝を大量に購入し、印材の王様である田黄（田黄）をなんとプラスチックの杓子（杓子）ですくって購入するような驚くべき光景も見られた。周慧珺氏にとつての第一回目の原稿料は、先輩の書家・胡問遂氏が届けてくれた。周慧珺氏は感無量だつた。ちなみに周慧珺氏の「潤格」（価格表）は上海書壇中のトップを走り、一尺平方メートルで五万元（七十五万円程度）まで上昇した。

上海中国画院は日中書道交流の窓口となつた。多岐来訪者の中でも北陸書道院の青柳志郎氏は毎年、書家を連れて画院を訪ね、周慧珺氏や韓天衡氏らと交流を図つた。周慧珺氏は一九八〇年、青柳氏の招聘により市文化局の

幹部や市図書館の通訳とともに日本に初めて訪問し、また一九九四年の上海・大阪友好都市二〇周年記念行事では大阪を訪問。同年より在上海日本国総領事館の要請が外交ルートを経由して周慧珺氏に届き、総領事夫人をはじめ女性館員や家族を中心とする書道教室の講師となつた。後には総領事の堀野重義氏や後任の有地一昭氏らも参加して周慧珺氏の指導を受け、書道講座は五年間も継続し、師弟ともに書道を通じて快い時間を過ごした。

上海書壇に十年君臨

一九八一年に中書協（中国書法家協会）が北京で創立、周慧珺氏は理事となつた。上海中国書法篆刻研究会は上海分会に名義が変更され、一九八九年に上海市書法家協会となつた。同年に周慧珺氏は常務理事に選出された。一九九八年十二月二十一日に第四回上海市書法家協会の会員大会で謝稚柳氏の後任として周慧珺氏が



《新竹》（元稹）

新篁才解籜
寒色已青葱
冉冉偏凝粉
蕭々漸引風……

主席に推戴された。副主席には韓天衡、張森、王偉平、吳建賢、張曉明の名氏が就任した。

周慧珺氏は着任後、「上海書法を振興せよ！」というスローガンを提唱し、事務方を充実するため、沃興華教授を華東師範大学より書協の秘書長に抜擢し、また書協の機関誌《上海書法通訊》一九九九年一月号には、「優良な伝統を発揚し、上海書法を振興しよう」という一文を寄稿。現状を徹底的に分析した上で、今後の様々な具体策を論じた。

同年六月十日の午前、「上海・大阪友好都市二十五周年記念書法交流展」の開幕式では、上海図書館で「上海書壇の創作について」をテーマにした弁論会を開催し、三百名ほどの会員を集めた。翌二〇〇〇年後半に北京で開催された「中書協第四回全国代表大会」では、沈鵬氏が主席に、周慧珺氏は副主席に選出された。二〇〇三年の「第五回上海市書法家協会会員大会」で周慧珺氏は再任された。二期目には各地方の書協との連携を強化し、新疆、山西、河南、湖北などの省書協との共催となる合同展を開催。市書法展や市青年展などを軌道に乗せた。

上海書壇に十年ほど君臨した周慧珺氏は、最後の仕上げに初の《海派書法晋京展》（上海書法の北京展）を開催し、成功に導いた。《海派書法晋京展》は二〇〇七年一月、中国美術館で開催され、「海派前賢作品展」「新海派作品展」「篆刻展」の三つで構成された。同展はアヘン戦争後の開港以来の、新旧の上海画壇・書壇・印壇を立体的に紹介する大型展覧会であった。市美術館・博物館、ならびに画院などが所蔵する趙之謙、吳昌碩、康有為、沈曾植らの約七十点の名品も陳列された。

展覧会に併せて、上海書画出版社は《海派代表書法家作品集シリーズ》を編纂し、《吳昌碩篇》《沈曾植篇》《李叔同篇》《沈尹默篇》《王蘧常篇》《來楚生篇》《潘伯鷹篇》《白蕉篇》《謝稚柳篇》《陸儼少篇》の十巻を出版。計一六七五点の書法作品と一一〇〇点余りの篆刻作品を掲載し、全巻で三〇キロを超えるその重厚感に満ち満ちた新刊図書も、同時に展示された。中共中央政治局常務委員・全人代委員長の呉邦國や、副委員長兼秘書長の盛華仁、國務委員の陳至立ら、政府要人も来場して、同展を高く評価した。

《海派書法晋京展》を首都で盛大に開催した主導者の周慧珺氏は、雑誌《書法》の「書壇で最も影響力がある人物十人」に選ばれた。

近年の総仕上げ

二〇一六年、周慧珺氏の書法作品を収蔵・展覧する「周慧珺書法芸術館」が上海の中心部にある上海文廟に落成し、副市長・趙雯女史（趙朴初氏の姪）が除幕した。二〇一七年、後進を育成するための「周慧珺書法芸術研究院」が徐匯区欽江路に創設。

二〇一八年、周慧珺氏は私財の二五〇〇萬元（約四億円）を投じ、「周慧珺書法芸術基金」を創設。中国共産党上海市宣伝部が正式に批准し、市文化広播影視管理局が管理する公認基金会だ。新鋭書家を育成するための「書法芸術賞」などを設置し、書法の展覧、出版、および普及活動を支援する事業を行っている。

中国では、上記のような「芸術館」「研究院」「基金会」の創立のためには行政の強いバックアップが不可欠である。全人代（全国人民代表大会）のトップである委員長・吳邦國氏が上記の三つの組織の題字を揮毫したことは、まさにその証である。

周慧珺氏への取材の依頼は、二年前から打診していた。実現に至ることができたのは、上海書協秘書長・潘善助氏と周慧珺氏の愛弟子である李静氏の多大なる支援による。心からの感謝を申し上げたい。



郭同慶 かく・どついでい
書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に來日。王蘧常、錢君匋、方世聰、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朵雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院名譽院長、東京海派書画院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生頭彰会会長、豊道春海頭彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名譽院士、上海吳昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる。